

# SAPPORO 教区 NEWS

## 第2号

2005年10月31日

発行：カトリック札幌司教区事務局広報部  
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10

Tel. 011-241-2785 / ホームページ : <http://www.csd.or.jp>

### 場崎・橋本 両神父様ご逝去

九月十三日に場崎柔辰神父様の葬儀ミサ・告別式

十月一日に橋本力神父様の葬儀ミサ・告別式

多くの参列者が悲しみのうちに安らかにと祈る

＝告別式で棺を囲み「主の召しあれば」をうたい送る司祭団＝



胆嚢悪性腫瘍のため入院  
加療中だったアシジのフラ  
ンシスコ場崎柔辰神父様  
(網走・美幌教会主任司祭)  
が九月十一日に帰天なさり、



次いで、すい臓癌のため入  
院加療中だったベトロ橋本  
力神父様(前 円山教会主  
任司祭)が九月二十八日に  
帰天なさる。  
ともに享年七十六歳。



お二人のお通夜、葬儀に  
はカテドラル、聖園幼稚園  
の第2会場や廊下まで参列

者が一杯で、長年にわたる両  
神父様の司牧への感謝と、  
お二人との別れを惜しんだ。  
両神父様の通夜・葬儀告  
別式には、司祭団も全道各  
地から集い、両司祭に神様



の下で安らかに憩うように  
と祈り、別れを告げた。  
説教の中ではお二人の神  
父様との思い出を谷内神父  
様と近藤神父様が熱く語ら  
れた。

両司祭を失い、教区とし  
て司牧を行っていく上で大  
きな痛手であることと、寂  
しさを悲しみを感じられる  
思いだったが、主が今私た  
ちの中で生きていることを  
固く信じ新たな出発を決意  
する司祭団であった。

※ 両神父様のお写真と略歴は計  
報欄に掲載しております ※

### 両神父様の納骨式 十月十六日に行われる



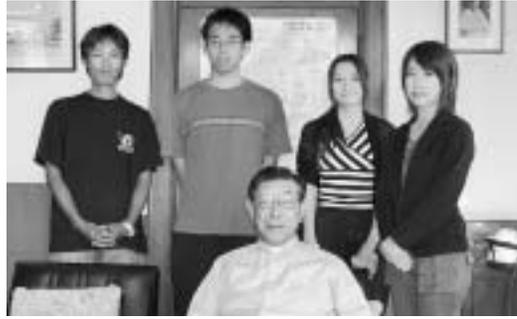
午後三時から、晴天に恵  
まれ、白石本通墓地(旧カ  
トリック白石墓地)で、地  
主敏夫司教様司式で、場崎  
柔辰神父様と橋本力神父様  
の納骨式が行われました。  
当日は、札幌地区の共同墓  
参の日でもあり信徒の納骨  
も行われ、二〇〇人以上の  
信者が参列しました。



散水するご遺族の方々

# WYDケルン大会

## 100万人参加で終了 教区参加者司教へ報告



九月二十五日(日)にワールドユースデー(WYD)ケルン大会に札幌教区から参加した青年たち十一名を代表して四名が地主司教様を訪れ報告した。

参加した青年たちは異口同音に、WYDで百万人の青年たちとともに分かち得た感動をどのように伝えたらよいか方法が見つからないほどWYDで感銘を受けたと熱く語っていた。



WYDケルン大会は八月十六日から二十一日まで行われ、日本からは司教団が取りまとめ、東京大司教区の岡田大司教様を団長に約三百人が参加した。本来は司教の下でカテケシスを受けて参加するのであるが、実際は個別に参加している団体が多く、今大会は世界各国から百万人の青年たち(ドイツのボランティアだけでも二十万人といわれている)が参加した大会であり、教区から参加した青年たちは貴重な時間を各国の青年たちとともにした。

参加したある青年は、宿泊は体育館等での雑魚寝(同行の司教様も含めて)がほとんどだったが、一緒に食事時間や、他国の言葉が話せなくてもボランティアとして熱心に活動する人々の姿、キリスト教が当たり前の状態の中と熱気に包まれた中に自分があることに大きな感動を受けたと語る。またもう一人の青年は、六kmから七kmの徒歩巡礼や他の国々の青年との交流、カテケシス、教皇ミサ等を通して、今まで自分で考えていた固定概念や経験とは違う考え方や姿をが見でき、将来を担っていく

若者の一人として、教会の中心となって活動していくという心が強くなったと語っていた。

また、この経験を伝えていくためにも、これからの青年の活動を確かなものとしていくためにも、教区の青年たちのネットワークをしっかりとしたものにしていきたいと語る。司教様からは、経験したことを出来るだけ多くの人々に伝えることが大切であること、青年のネットワーク作りには今までのような歴史があり、形から入るのではなく、実際の活動に集い、そこからネットワークを育てていくことも一つの方法で大切なことであると述べられた。

世界各地でWYDの世界大会が開催されることになり、一九八七年以来、「国際青年フォーラム」と「世界青年の日」記念式典が教皇臨席のもとに開催され、全世界から大勢の若者が集まるようになった。

初回は一九八七年にブエノスアイレスで開かれ、以降、サンティアゴ・デ・コンポステラ(一九八九年)、チェストコバ(一九九一年)、デンバー(一九九三年)、マニラ(一九九五年)、パリ(一九九七年)、ローマ(二〇〇〇年)、トロント(二〇〇二年)で開催されてきた。

7月4日～6日に行われた  
**全道司祭大会から**  
Vol.2  
「信徒と共に手を携えて歩むこれからの宣教司牧」

### 提言編

提言一  
カリタス家庭支援センターからの報告と提言  
代表 堤 邑江氏

センターは開設当初、年間予想相談件数を七十件と見込んでいたが、予想をはるかに超えて六百件以上にもなったことに驚きを感じた。信者と一般市民の割合は、約四対六となっているという。相談の内容としては、人間関係、健康・保険、依存症、離婚問題などがあげられ、このセンターが小教区と協力しながら、福音宣教のお力添えをしたいと願っている旨の提案がなされた。

### 提言二 信徒からの提言

水上 泰助氏  
水上氏は、銀行員として長年会社組織に関わり、退職前には取締役として一般企業に招かれ、赤字経営を黒字経営にした経験がある。氏は、教会として会社

経営から学ぶべきヒントがあり、そこから時代のニーズにあった宣教が可能であることを指摘した。地域に開かれた小教区創りを優先に、可能性のあるビジョンを提示した。思い切った小教区の統廃合、そして司祭・信徒・修道者の連携を密にし、将来の教会を築きあげていきたい事を述べ司祭団に提言した。



提言する阿部、水上両氏

### 提言三 信徒からの提言

阿部 包氏

大学で聖書学を講じている阿部氏は、パウロの手紙を引用しながら、信徒がキリストの体の一員（肢体）であり、与えられた役割があることを強調した。司祭が不在になった時も、信徒は協力しながらキリスト共同体を築き上げている例を紹介し、司祭は司祭としての役割があり、信徒は信徒

としての役割があることを述べ、信徒を信頼し、それぞれの役割分担を担っていくことが大切である旨の提言がなされた。



熱心に語る川上神父様

### 提言四 司祭からの提言

川上 剛神父

十一年振りにさいたま教区から札幌教区へ戻ってきた師は、各教区で取り組んでいる共同司牧宣教（大阪・東京・さいたま・札幌の各教区）の現状と伸び悩む教会の問題を指摘した。特に意識しなければなら

ないのは司祭の回心であり、いまだに聖職者主義が強いことを説明した。また、信徒が司祭に遠慮している面もあり、主任司祭によって小教区が大きく変わってしまう現実も否めない。司祭人事も地域性というよりも司祭中心の異動になっ

祭としての反省が必要であることを提言した。

### 分かち合い編

五グループに分かれて分かち合いを行った。

※信徒の人材をもっと掘り起こしたい。

※信徒でも担えるものはどんどん信徒に任せていくことが必要。

※司祭にとって謙虚な姿勢が必要。

※高齢化・病気の問題を抱えている中で、出来る範囲内で歩んで行きたい。

※教区の方向性についてはっきりした指針がほしい。

※小教区外で活動している団体も受け入れてほしい。

※青少年の育成が必要だ。

※小教区を越えて青少年の集まれる場を作らねばならぬ。

※司教と司祭の対話が必要とあれば良い……



参加した司祭団

## 第三十八回 北方幼稚園教職員 研修大会開催

七月二十七日と二十八日の両日札幌ガーデンパレスで全道のカトリック幼稚園の園長教職員が参加し開催される

講演は、講師に鈴木信一神父様（パウロ会）を迎え「平和をもたらす人は幸いである」と題し、戦後六十年を迎えた私たちが果たしていかななくてはならないカトリック幼稚園の使命について熱く語っていただいた。

### #平和の二つの側面

一つは、戦争の無い状態で、二つ目は、信頼や思いやりが大切にされる世界である。私たちが平和を得るために払った犠牲が六十年前の戦争である。平和を受け継ぐ努力とは、戦争の痛みを伝承することでもある。この意識を私たちはどれ程受け継いでいるだろうか。このことについて、広島平和文化センター企画のビデオ「ヒロシマ・母たちの祈り」を通して考える。

#平和という視点からカトリック幼稚園の使命を考える

カトリック的な価値とは、①時代や状況、文化を越えて大切なもの ②ファッションではなく、変わることはない「命の輝き」③宗教を越える普遍性を持つもの ④この「命の根源的輝き」を大切にすること（愛）が、平和を生み出すことである。

### #平和を生み出す愛

：愛の二つの側面  
①身内への愛（家族・友人・同郷人・同民族・同国家）で、きわめて自然な愛で、身内と部外者の間に線引きをし、異なる行動基準（倫理

）を適用するもの。

②人間への愛（差別という線引きをしない・普遍的）で、災害時の救援活動、ボランティア、国際NGOなどを行う人々の基盤となっているもの。

#愛を育てる二つのポイント（教育のポイント）  
それは自立と協調。

自立とは—身体的・精神的・感性的・経済的に個の自立と成熟がなされていることである。しかし、現在は感性的自立と精神的自立が課題となっている。

協調とは—自立だけでは不十分であり、しかし自立は不可欠要素である。協調に必要なものは、  
①コミュニケーション能力  
a 発信能力  
（個性を理解すること、個性を尊重すること）  
b 受信能力  
②絆と信頼を深める心  
③問題解決能力  
などである。

#行事はポリシー（カトリックのカラー）確認の場  
クリスマス絵本を活用して  
・ 受信能力を高める  
・ 感じる心を育てる  
・ 想像力を豊かにする

・ 思いやる心を育てる  
・ 表現する力を育てる  
ように読み聞かせをしてあげてください。

教育現場は、未来の平和が作られていく場である。一人ひとりの手で、平和が作られ、また壊されていく。子どもたちは園で何を身に着けたかについては無自覚であるが、それだけに、深く身につける。

従って、カトリック的「愛」を育む使命を大切にすることが重要であり、そこに平和の道があると、鈴木神父様は熱く語られた。



熱心に講演に耳を傾けていた先生方。幼児教育の大切さが叫ばれて久しいが、これからの現場での活躍を期待したい。

### 月形藤の園 平和を祈る十日間

「いつまでも『平和』と云う字を忘れずに」

阿部ハル様の作品より  
月形藤の園老人ホームでは、例年八月十五日になると「聖母被昇天祭」としてお祈りを捧げてきました。今年も終戦六十年という大きな節目の年にあたり、八月六日から十五日までの十日間を「月形藤の園平和を祈る十日間」と定めました。

平和を願う利用者の皆様や教会関係者、職員が心をひとつにして「世界平和」を祈るために取り組んだ様子をご紹介します。

朝は朝礼の中で、職員が平和の祈りを捧げることから始まります。次に朝礼が終わると、利用者の皆様から予めリクエストを頂いていた「平和をイメージする曲」を全館に放送しました。寄せられた曲の中には「長崎の鐘」や「アメージンググレイス」「岸壁の母」などがあり、ジャンルを問わず個人それぞれの思いの曲を流すことが出来ました。十日間で全十九曲を放送しましたが、リクエスト

があまりに多く全てを放送することが出来ないほどでした。

また、利用者からは「平和」からイメージした言葉やコロージュで表現して書いて頂いたものを募集したり、日中、時間を見つけては小グループで折鶴を折るなどして平和への願いを表していました。午後には「昭和と戦争」といった戦後日本の復興について収録された全7巻のビデオを全館放映し、皆様に戦中・戦後の昭和の時代をどのように過ごしてきたのか振り返る時間を持つことが出来ました。



焼香をする利用者の方々

期間中、正面玄関ホールには「平和のメモリアルコーナー」を設け、広島・長崎の原子爆弾被災の写真や資料を閲覧できるようにし、傍にはいつでも焼香できるように準備しました。

利用者の皆様も期間中毎日お線香をあげ、熱心に戦争犠牲者に手を合わせる姿が多く見られ心打たれる思いでした。現在は、文集作りに取り組んでいます。園長をはじめ介護員、看護師、事務職員、業務員、厨房職員、相談員といった藤の園の全職員がそれぞれ八十名の利用者一人ひとりに、戦時中の思い出や平和に対する願いを直接聞き取り、文集を作るといった内容です。編集していく中で、高齢者の皆様が多様な思いで戦時を乗り越えてきたのだと、関わった職員も改めて知ることができたことは大きな恵みとなりました。

「今まで誰にも話したことがなかったけれど、六十年経った今ならお話できそうです……」と、戦争中の辛い体験談をお話して下さった方もいらっしゃいました。こうした文集作りも利用者の皆様のご理解とご協力があっての取り組みと、職員一同感謝の気持ち一杯です。

最終日の八月十五日には、併設されているカトリック新田教会で「平和を祈るミサ」が行われました。ミサの中では、これまで

での作品を奉納し、関係者が心を一つに平和を祈ることが出来ました。



この十日間は、平和の意味をより深く考え、祈る機会になりましたことを神様に感謝します。

（月形藤の園生活相談員  
加藤靖之氏 談話）

### 北海道ダルク一周年 記念フォーラム開催



講演する倉田氏

と題してフォーラムが開催された。当日は、会場一杯の参加者で、北海道ダルク利用者五名から次々と体験談が語られ、思わず笑みがこぼれるような内容から、切実な内容まで分かち合われ、まだまだ他の体験談を聞きたくするようなとても有意義でホットな時間を、参加者一同が共にすることができた。

「刑罰より治療を」と題した倉田めばさんの基調講演では、大阪ダルクでの措置所や刑務所への訪問等の事例を紹介しながら、依存症回復プログラムの必要性と、そのプログラムが存在することを依存症者が知ることが出来るのが重要であることを強く訴えられた。

また、アメリカ視察で目の当たりにした、十二ステップからなる回復プログラムが警察署や措置所の一番目立つところに掲示されていることや、日本の現状とは大きく異なる「ドラッグコート(薬物治療法廷)」の話がされ、日本でも「ドラッグコート」の必要性を訴え、その実現を目指し、まずは、弁護士の方から理解して頂き、その後、実現するように皆さんと一緒に

に行政に働きかけ続けていきたい旨を熱く語られた。

### 二〇〇五年 国際デー開催

晴天の下、九月二十五日(日)に、第六回国際デーが行われた。



国際ミサがカトリック札幌北一条教会で、祭りが隣接する聖園幼稚園の園庭でおよそ一、〇〇〇人(実行委員会発表)が参集して行われた。

実行委員の一人によると、……「今、となりの部屋で私をアミにまいて海へ落とす……と話しているの」……とSOSが夜半に飛び込む。とにかく対応するには……

と言うようないつものうえるかむはうすの話題と違って、国際デーの一日は嬉しく、愉快に流れる。



(実行委員 文)

## 日本カトリック難民移住移動者委員会 全国大会・札幌で開催

年明けから始めた会合が、六月にPR、ボランティア募集、出店、出し物決めと準備が進む。教会関係で募る数は少ないね、教会の中は年齢が?/?/?とつぶやきながらも、大学生、社会人ボランティアが八十人を数えて、運営も落ち着いてきた祭りであったことはありがたい。十六カ国の人々が自分の国の味を出す。「それを他の国の人には自分の味に合わせてではなく、そのまま、そのものを味わって楽しむことができれば、そこに自分の慣れた枠を越えた新しい自分がある。」と、担当司祭のマイレット神父が話す国際デーの目的……市民の国際化への歩み……を実現した催しだったといえる。

この研修会は「もうひとつの世界・北海道、国際化への変貌」をテーマに、十月九日と十日にかけて、札幌国際ユースホテルと札幌留学生交流センターを会場にして、全国から一〇〇名近い参加者が集まり開催された。

第一日は地主敏夫司教と谷大二担当司教のあいさつのもと、以下の五つの活動報告が行われた。

①「外国人差別について」はドイツ人のオラフ・カルトハウスさんが、稚内と小樽の浴場で入浴拒否された体験を語り、外国人への偏見と差別によるこのような人権侵害を放置できず裁判に至り、勝訴した経緯を報告した。

②「船員司牧について」は、苦小牧の「船員奉仕会(AOS)」の柳谷豊さんが報告し、キリスト教超教派の協力のもと、入港する船員たちに憩いと交わりの場を提供し、また様々な相談にも対応している活動が紹介された。

③DV(ドメスティック・バイオレンス)については「在日外国人の人権を守る会(SPR)」の牧下徳子さんが、家庭内で夫が妻や子どもたちにふるう凄まじい暴力の実態を報告し、最近

は特に国際結婚にも人種差別に基づいたDV事例が多くなり、被害女性の保護と、加害男性へのより強い罰則を盛り込んだ「DV防止法」の改正が望まれると結んだ。

④「国際結婚における日本の生活について」は、札幌在住二十二年になるフィリピン出身のスーザン藤田さんが報告し、言葉の壁や日本の生活習慣へのとまどい、更に自分のカトリック信仰と夫の家の仏教との関係で苦しんだ体験などが語られ参加者の共感を呼んだ。

⑤「教会を通してのフィリピン家族との交わりについて」は、網走教会の松下良子さんが報告し、北見地区においてフィリピン家族とどのように違和感や偏見なしに友達の輪を広げることができたか、その経緯が語られた。

夕方から二日目の午前中にかけては、次の七つの分科会に分かれて更に討論を深め合った。

「一」差別

「二」家族(国際結婚・DV)

「三」日本語教育

「四」仕事(移住労働者の権利)

「五」教会の対応(ネットワーク作り)

「六」子どもの教育

「七」船員司牧-AOS

そして、これらの分科会の成果を互いに発表し合った後、国籍や人種、更に差別や偏見を乗り越えて『多民族多文化共生社会』を目指した祈りの一致の内に、二日間の研修会を結んだ。

### 八月十五日に出された平和への意見広告



=賛同者名が四葉にモチーフ化され平和を訴えた=

戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。(ヨハネ・パウロ二世)

日本国憲法第二章 戦争の放棄 第九条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

平和を守るため、日本憲法第九条を守っていかなければならないという強い祈りをこめて八月十五日の北海道新聞の朝刊に意見広告が出された。

多くの人々の平和への祈りが、間違った方向への憲法改正にならないように願うと同時に、それぞれが出る小さなことを、少しずつ実行していくことが大切なような気がする。

この意見広告は、私たちが出来ることから、手を携えて、一歩ずつ着実に前進して行く決意の表れである。

# 各地区の動き

## 北見地区五十周年記念式典行われる

台風一過の澄み渡る青空の下、八月二十八日に北見教会と北見藤幼稚園を会場に北見地区設立五十周年記念ミサと式典が行われ、次のような報告が寄せられました。



まつて五十周年の喜びを共に分かち合いました。

記念式典は、地主司教様の司式による「記念ミサ」で始まりました。地主司教様は、説教の中で、教会の誕生について次のように話されました。「教会が誕生したのは、ご復活から五十日目の、使徒たちが聖霊に満たされた聖霊降臨の日でした。神様の霊が降り、司祭と信者の共同体ができた時に教会ができたのです。この時の教会は、建物のない、言葉や習慣の異なるいろいろな国の人々の集まりでした。ですから、教会に建物はいりません。一致といても一色になった一致でなく、いろいろな違った人々が集まり、ただイエスを信じ、共に愛しあい、共に補い合う人たちの集まりが教会です。カトリックとは違うものが違ったままで一つになるということ、個性や違いそのものを互いに補いあつて一致を示して行くことがもつと豊かになるのです。そして、教会に与えられた使命は神様の愛を人々に伝える「宣教」です。」このお話を聴いて、私たちは教会の原点に立ち返り、心を新たに次の一歩を踏みだそうと意をつよくしました。

ミサの中では、五十周年記念誌や北見地方の特産物のたまねぎとハツカを奉納し、神様にこの五十年間の感謝と賛美を捧げました。

午後からは、場所を北見藤幼稚園に移して「祝賀会」を行いました。はじめに、川上神父様から、これまでの五十年間を支えてくださった北見地区の五教会のすべての方々、幼稚園の皆さん、光の苑の皆さん、北見藤高校の皆さんへの感謝の言葉とこれからの五十年に向かつて心一つにして出発したいとのご挨拶がありました。パウロ神父様の乾杯の音頭で祝賀会が始まりましたが、その挨拶の中でパウロ神父様は、「これからも神様を信じながら人々に仕える教会、社会の中にいきる教会であるように。」とお話しされました。

祝賀会では、余興として五つの教会から合唱やフルートの演奏などの出し物や子どもたちから司教様や神父様方への質問コーナーなどもあり、この五十年間の想い出を語りあいながら昼食を共にし、とても楽しい時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、日程を日曜日にしたため、ご出席の叶わなかった札幌教区の各地区の神父様方にお詫びするとともに、五十年の後半から現在までお導きくださったことに感謝申し上げます。また、入院のために式典にご出席できず、この九月十一日に帰天されました場崎柔晨神父様のご冥福を心からお祈りいたします。

北見地区に対して、お祈りしてください、支えてくださつたすべての皆様に感謝し、報告とさせていただきます。

（北見教会 大坪昌広 文）

当日は、地主司教様とかつて北見地区で宣教師牧活動されたルカ神父様、中谷神父様、伊藤神父様にご出席いただき、地区長の川上神父様、この地区と共に歩まれ最も長く働いてくださつているパウロ神父様をはじめ大人や子どもを合わせて約一六〇名の人々が集

ました。地主司教様の司式による「記念ミサ」で始まりました。地主司教様は、説教の中で、教会の誕生について次のように話されました。「教会が誕生したのは、ご復活から五十日目の、使徒たちが聖霊に満たされた聖霊降臨の日でした。神様の霊が降り、司祭と信者の共同体ができた時に教会ができたのです。この時の教会は、建物のない、言葉や習慣の異なるいろいろな国の人々の集まりでした。ですから、教会に建物はいりません。一致といても一色になった一致でなく、いろいろな違った人々が集まり、ただイエスを信じ、共に愛しあい、共に補い合う人たちの集まりが教会です。カトリックとは違うものが違ったままで一つになるということ、個性や違いそのものを互いに補いあつて一致を示して行くことがもつと豊かになるのです。そして、教会に与えられた使命は神様の愛を人々に伝える「宣教」です。」このお話を聴いて、私たちは教会の原点に立ち返り、心を新たに次の一歩を踏みだそうと意をつよくしました。

ミサの中では、五十周年記念誌や北見地方の特産物のたまねぎとハツカを奉納し、神様にこの五十年間の感謝と賛美を捧げました。

午後からは、場所を北見藤幼稚園に移して「祝賀会」を行いました。はじめに、川上神父様から、これまでの五十年間を支えてくださった北見地区の五教会のすべての方々、幼稚園の皆さん、光の苑の皆さん、北見藤高校の皆さんへの感謝の言葉とこれからの五十年に向かつて心一つにして出発したいとのご挨拶がありました。パウロ神父様の乾杯の音頭で祝賀会が始まりましたが、その挨拶の中でパウロ神父様は、「これからも神様を信じながら人々に仕える教会、社会の中にいきる教会であるように。」とお話しされました。

祝賀会では、余興として五つの教会から合唱やフルートの演奏などの出し物や子どもたちから司教様や神父様方への質問コーナーなどもあり、この五十年間の想い出を語りあいながら昼食を共にし、とても楽しい時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、日程を日曜日にしたため、ご出席の叶わなかった札幌教区の各地区の神父様方にお詫びするとともに、五十年の後半から現在までお導きくださったことに感謝申し上げます。また、入院のために式典にご出席できず、この九月十一日に帰天されました場崎柔晨神父様のご冥福を心からお祈りいたします。

（北見教会 大坪昌広 文）



子どもからの質問コーナー



主の平安  
大会が終わり反省会の際にメンバーの一人が「今までの、何も思わずカトリック大会に出ていたが、あのようにして成り立ち流れているんだね。今回初めてわかった。」という言葉が耳にしてその通りだと思えました。毎年出席していたわけではありませんが、講演も熱心に聞いていた訳でも

## 旭川地区 カトリック大会開催

八月二十一日大雪クリスタルホールでカトリック大会・堅信式が行われた。



なく、分科会においては発言するのでもなく、只々、各人の思いや考えを耳にしてその考えの素晴らしさや、思いの深さに神様の存在を再確認するばかりでしたが、ここ数年、神父や信徒の高齢化、教会の統合など様々な問題が投げられ、ポーツとしている私にまで大会役員に推されてしまい、人選ミスだよとの思いの中で動き出しました。

各教会二名のメンバー達とは実によく打ち解けあい、全員未経験者ということで色々な意見や疑問に突き当たりましたが、月一回の話し合いで続けていくには、何を削ぎ落として合理的にかつ充実した大会にするかということに集中しました。講演は誰にするかは、とても難しく、広い年齢層なのでいかに理解してもらい、それぞれが実り豊かにとの思いもあり、色々な事情も考慮しライヤ神父様に決定しました。師は「私なんかお役に立てるかな」というメールを下さいました（アメリカ人ではないんですよね。日本人より慎重な深い）が、内容はユーモアのある、時代と人の変化の話では、ふっと古き良き

時間に戻してもらい、何か忘れ物を思い出させてもらったりもしました。例年の冊子もプリントにして仕事のスリム化を心掛けましたがいかがでしたか？分科会もそれぞれ充実していたようでメンバー全員ほっとした気持ちです。私たちは、話し合いの中、何回かカトリック大会は神父が主なのか、信徒が主なのかということに突き当たり、次の大会に持ち越してしまふことになりましたが、もつとたくさん同じテーブルにつき語り合いが必要だと思いました。片方だけの思いや意志だけでは駄目ですし、任せただけでは、これからの色々な行事やこのような大会は進行が大変になると思います。

ともあれ無事、各教会の皆様協力で大会は終了しました。ありがとうございます。早朝から、遠路お越し頂いたライヤ神父様、地方教会の方々には感謝します。そして、事故もなく帰路に着けたことを神様に感謝します。来年も、元気に会いしましょうね。《実行委員からの手紙より》

## 釧路地区

### 宣教師牧評議会主催

#### 信徒大会開催

去る八月二八日に釧路教会に於いて地区の信徒大会が開催された。参加者は一六〇名程。



テーマは聖体の年に当たり「聖体の年に学ぶ」とし、午前一〇時三〇分より、宣教師評議会の挨拶に続き、七名の司祭によるミサが行われ、午後から講演会が開かれた。

講師に東京瀬田聖アントニオ神学院院長 リノ小高毅神父さま（神学博士 専攻「組織神学、教父学」）をお招きし、カリシモ地区長がユニークな形で「小高神父さまはギリシヤ語が専門で、ギリシヤ語から直接訳

された書物など数多く出版され、そればかりではなく、神秘的要素を専門とされた神父さまです。最近の著書としては『よくわかるカトリック』があります」と講師をご紹介下さった。

講演は、前教皇ヨハネ・パウロ二世回勅「教会に命を与える聖体」使徒の書簡「主よ、一緒に泊りください」を中心に、回勅の結びの最後にある祈り：「よき牧者にしてまことのパンにましますイエスよ、わたしたちをあわれんでください」で始まり、ご自分の青年時代に群馬県の教会で過ごされた時、宣教師の神父さん方のご聖体に対する信仰には叶わないと感じたこと、ローマで学ばれた時のこと、そしてロシア教会や、ポーランドの教会を巡礼されたこと等を織りませその違いをお話された。

講演は約一時間三〇分ほど続けられ、その間に席を立つ人は居なかった。当地区は十勝、釧路、根室の三支庁にまたがり、小教区間の距離的な関係もあり、中央から講師を招き、このような講演会を催すことは頻繁には出来ないもので、真一言も聞き漏らすまいと真

剣な様子だった。聖体の年も十月末と終盤になったが、この学びを通して、ご聖体に対する信仰を学ぶ糸口を掴めたと思う。



参加者の一人が「自分自身に響いたのは、小高神父さまがポーランドでミサに預かった際、聖体拝領の時、ミサの参加者の三分一位の信者しか聖体を頂かないので、不思議に思いました。後で神父さまに「ポーランドはカトリック国なのになぜ皆さんご聖体を頂かないのですか？」と訊ねましたら、あちらの神父さまは「聞く処に依ると日本の教会は、ミサに参加した信者は皆聖体を頂くと聞いたが、私達から見ればそれは「おかしな話」との答えでした。」

「日頃の生活を反省してみたら、きょうは頂けないな、と思う時だってあるはずでしょう」確かにそれはあると思う。聖体から離れることも良くないが、かといってマンネリになって近付き過ぎるのも考えものだと思う。ミサに参加するにも遅刻しないで、最初からキチンと出ていけば痛悔の祈りもあるし、そこで真剣に痛悔が出来れば必ずから告解の必要さも解るし、聖体拝領の直前でも主の祈りで「わたしたちの罪をおゆるしてください」と唱る。本当にごミサの流れは良く組み立てられていると思う。聖体そのものをあまり深く考えない処にマンネリ化が生じてくるのではないだろうか、私達は聖体を大切に、一歩一歩近付き、今一度聖体の前で祈る謙虚さと、信仰を育てる必要があるのではないか。その処が少しなおざりになって来たことも事実です。と話されたことがすごく心に響いた。

こうして、今年の釧路地区信徒大会は大きな実りを得ることが出来たことを神に感謝致します。

（運営委員長 中田文夫 文）

函館地区

合同堅信式行われる

九月十一日(日)に、新しくなった宮前町教会で、函館地区合同の堅信式が地主敏夫司教様司式のもとで行われた。当日は八雲から一名、元町から三名、湯川から九名、当別から一名、宮前町から九名、遠方の遠軽から二名の方々が堅信を授かった。

堅信の秘跡は、洗礼及び聖体と一緒に組み合わせられて「キリスト教入信の秘跡」を構成します。この三つは一体でなければなりません。「堅信の秘跡によって信者はいつそう完全に教会に統合され、聖霊の特別な力で強められて、キリストの真の証人として、言葉と行いをもって、信仰を広めかつ擁護するようにいつそう強く義務づけられます。」堅信は洗礼の完成なのです。堅信は人の靈魂に消えない霊的なしるし「霊印」を記します。ここに、堅信に授かった人々が、キリスト者として強められ、歩んでいくことができるように祈ってやまない。

札幌地区

使徒職大会開催

今、札幌地区でなすべきことは何か



十月二日(日)午前十時から札幌・藤学園講堂で今、札幌地区でなすべきことは何かをテーマに札幌地区宣司評主催で開催された。開催内容は、地主敏夫司教様による「宣教する共同体づくりをめざして」と題しての講演会とミサであった。

地主司教様からは、現在の教区・地区の現状を踏まえ、日本を始めとした各国の信徒数に対する司祭数の割合などの具体的データも出され、教会とは、その使命とは、日本の中の教会とはについて熱く語られ、これから私たちが担ってい

かなければならない方向性の一つが示されたような気がする。

最後に地主司教様は、札幌教区では北見地区がモデル地区かもしれないと語り、北見地区では、全小教区の教会維持費が地区に一本化され、地区の中でどこ

のどの分野が優先的に経費配分が必要かが検討され効果的に活用されていることを述べた。また、苦小牧では、新富町教会と表町教会とを統合し苦小牧教会(仮称)としたい旨の要望が出されていること、旭川や函館でも、一つの大きな教会をつくって幹事教会のようにしていきたいという願いもあることを語った。地区ごとに特徴があるので一概には言えないが、札幌地区もブロック単位であれば教会の財政や司牧全体を見ることは可能であり、宣教へのエネルギーがその中で生かされることを期待していると語った。

札幌地区山鼻教会

献堂七十五周年

十月一日(土)献堂七十五周年記念ミサが、地主敏夫司教様司式で執り行われた。それに先立ち、九月十日に献堂七十五周年を記念して、東京教区高円寺教会の晴佐久昌英神父様を招き講演会が行われた。内容は次のような内容だった。

「神様、七十五年おめでとうございます」私たちが神様に言うのは僭越ですが、神様がこの地に初めて教会をお創りになって七十五年。泣いたり笑ったりいろいろあったでしょうけれども、今日こうして節目の時を迎えて一緒に感謝できることを一番喜んでい

苦小牧地区

第十回カトリック  
苦小牧地区信徒大会

十月十六日、信徒、修道者、司祭の総勢百六十名が参加し「感謝の祭儀」一日曜日に何をしているの—日曜日に何をしてい

るのか。旧約聖書の創世記をみると、日曜日は天地創造の始まった日、第一日目である。神が宇宙を創造された最初の日だ。また、一週間が終わって、輪をひと回りするように迎えた八日目だ。一日目でありながら八日目の日曜日。再出発の日だ。キリストの復活によって始まる新しい天地創造の日だ。だから、日曜日こそ小さい事でも天地創造に協力できる日として、他の日とは違った特別な日にする。例えば、音楽を聞く、本を読む、友人と会う、子供と遊ぶ。自身自身を生かす日とする。それでは、なぜ日曜日にミサがあるのか。ヨハネ二

を迎えている。何の心配もないし、神様はちゃんとやることをやっておられるじゃないか。深い安心感があつてそう思えた時に、よ

うしてやって来て、いつものように思いついた話を思いついたように話すだけですけれど、神様が働いている。だから、私が口を開けばきつと救われる人がいると、そう信じて口を開きま

す。摂理を信じます。……「今」ということを強調するために今日来たのだと僕は自分で理解しています。

……「神は共に居てください。今ここに救い主がおられる。あなたを生かして愛して、あなたに必要な恵みを全て与えてくれる。」そのことは当たり前前の事だし、いつもそういうミサをして、お説教を聞いて学びあっている。僕に言わせればそれ無しには片時も生きていけない。改めてもう一度、基本中の基本、一番土台となるところを、私のカ

リスマで言うならそこに特徴があるので、今日はそれを僕は言いに来たわけだ。……と暖かく、熱く語られた。



○章一九―二九を読むと、復活したキリストが弟子たちに現れる箇所、その日は日曜日だった。最初の日曜日、弟子たちが集まっていた所にトマスは一緒にいなかった。だから、他の弟子たちが「主を見た」と言っても信じなかった。八日目の次の日曜日、トマスもいた。イエスに出会えて初めて信じた。二つの違いはどこにあるか。それは、信者の集いの中に入っていたかどうかだ。キリストの弟子たちと集う事によってキリストに出会える。集わなければ信仰は持てなくなる。だから教会では「日曜日教会に行け」と言う。

また、ルカ二四章一三―三五は私たちのミサの話だ。み言葉を聞いて、聖体をいただいたら、一日目の

天地創造の民として、八日目の復活を体験した人として、福音をのべ伝えるのは私たちの務めだ。私たちが今生きているのは偶然ではない。神から必要とされて生かされているのだ。今日、キリストの証をするに

はちょうどいい人数だ。行け。グリム神父の熱い講話と七人の司祭によるミサで信徒大会は終了した。尚、ミサ献金一四、五〇三円は、カリタス・ジャパンを通じてパキスタン地震災害のために送られる。

**カリタス家庭支援センター活動支援 “クリスマスコンサート” 開催のお知らせ**

日時：2005年12月4日（日） 開場：14：10 開演：14：30 場所：カトリック北1条教会 聖堂  
 プログラム：演奏者 北嶋 康子（ソプラノ） 齊藤 美幸（ソプラノ） 高橋実規子（ソプラノ）  
 手戸美穂子（フルート） 坂口 睦（ピアノ）  
 主な曲目 アヴェマリア エーデルワイス ドレミの歌 ホワイトクリスマス 他  
 演奏者のご好意にて入場料は無料です。

主催：支援コンサート実行委員会 委員長 手戸 一郎 コンサート事務局連絡先：011-261-2188

- ※ ミニバザーを同時に開催いたします。
- ※ カリタス家庭支援センターの活動が長く続けられますようにご支援よろしくお願いたします。
- ※ カリタス家庭支援センターでは、専門のソーシャルワーカーがあなたと共に生活の困難さとお向き合い、問題の解決をお手伝いしております。（無料） 相談受付電話：011-252-5766

**各地区の行事予定**

**教 区**

11月23日（水・勤労感謝の日） 久野 勉神父様の金祝ミサ （北一条教会）

**札幌地区**

11月3日（木） 札幌地区一日研修会 （北十一条教会）  
 5日（土） 聖書とは何？ （北十一条教会）

**函館地区**

11月27日（日） 地区合同ミサ 聖書講話 （宮前町教会）  
 12月12日（月）～14日（水） 待降節共同回心式 （湯川・元町・宮前町教会）  
 23日（金） 地区合同クリスマスの集い （宮前町教会）

**旭川地区**

11月9日（水）～10日（木） 旭川地区会議 （カトリックセンター）  
 12月7日（水）～8日（木） 旭川地区会議 （カトリックセンター）  
 25日（日） 旭川市内合同降誕祭「日中のミサ」 （旭川5条教会）  
 1月1日（日） 旭川市内合同元旦ミサ「神の母マリア」 （旭川5条教会）  
 9日（月）～10日（火） 旭川地区侍者会・召命の集い （カトリックセンター）

**苫小牧地区**

11月9日（水） 苫小牧船員奉仕会役員会 （新富町教会）  
 20日（日） 苫小牧地区連絡協議会 （新富町教会）  
 25日（金）～26日（土） 全国カトリック船員奉仕会 AOS 大会参加 （横浜）  
 12月10日（土） 市民クリスマス会 （苫小牧市民会館）

**北見地区**

11月23日（水） 黙想会 講師 岡田武夫大司教 （北見教会）  
 12月 クリスマス募金  
 1月 オホーツク冬期学校

訃報

帰天された神父様やシスターの方の神の国での安息を心よりお祈りいたします

教区司祭

アジジのフランシスコ

場崎 柔農神父



一九二九年 室蘭市に生まれる

一九六一年 司祭叙階

富岡、円山、北二六条教会助任

一九六七年 富岡教会主任

一九七八年 北二六条、山

鼻、俱知安、小野幌、岩

見沢、三笠、新田教会主任を歴任

二〇〇三年 網走、美幌教会主任

二〇〇五年七月 病氣療養のため入院

二〇〇五年九月十一日 帰天 享年七十六歳

一九一一年 イタリアに生まれる

一九一一年 イタリアに生まれる

一九一一年 イタリアに生まれる

ペトロ 橋本 力神父



一九二九年 札幌市に生まれる

一九六一年 司祭叙階

ローマ・ウルバノ大で教会法を学ぶ

一九六六年 帰国し、北一条、円山教会助任

一九六九年 俱知安、山鼻、宮前町、住ノ江、富岡、北広島、長沼、夕張

教会主任を歴任

二〇〇四年 円山教会主任

二〇〇五年八月十五日 病氣療養専念のため主任退任

二〇〇五年九月二十八日 帰天 享年七十六歳

一九三三年 司祭叙階

一九五三年 中国から引き上げ来日

一九五八年 新川教会主任

一九六八年 池田教会主任

一九七七年 根室教会主任

一九八四年 池田教会主任

一九九九年 イタリアへ帰国

二〇〇五年九月七日 帰天 享年九十四歳

一九三一年 釧路市に生まれる

一九五七年 入会

一九六〇年 初誓願

一九六五年 終生誓願

二〇〇五年八月二十日 帰天 享年七十四歳



フランシスコ会司祭 ステファノ・チビディニ神父

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

S R・M ホノラータ 三輪 陽子



一九三一年 釧路市に生まれる

一九五七年 入会

一九六〇年 初誓願

一九六五年 終生誓願

二〇〇五年八月二十日 帰天 享年七十四歳

教区風の風

「全道青年の集い in札幌」をおえて!

今回の全道青年の集いは「生かされてこそ人は生きる」をテーマに行ってきました。このテーマにした理由は、自分って何だろう、何で生きているんだらうか、自分は役に立っているんだらうかと思ったり、怒られるからやら。そのように一日を過ごしている様に思えます。実際自分もそうだったといえます。看護師という仕事についている私ですが、日々看護の仕事に携わる中で、自分は先輩看護師や医者から言われるがままに業務を行っている、日々を過ごしていただけのように思います。忙しく責任のある仕事ですが、今までの自分を振り返って見ると、自分が何かをしたという実感を持てませんでした。そんな時、患者さん(他の人)のために自分は役立っているのだらうか、自分の能力って何だろうと考えた気がしてきました。そんな時、全道青年の集いの話があり、自分が上に立って何ができるだらうか、どこまで出来るだらうかと思いついて、今度、全道青年の集いに行きたいと思ってきました。しかし、全道をよく知っている人たちは全道を作っても、今までの全道と同じになっせまい。自分の能力を見直せないと、今回青年の集い実行委員を一度もやったことのないメンバーで集める事にしました。さて、実際に会議や準備を行っていくとどうでしょう。自分の能力を見出すどころか自分の甘さ、準備不足、計画性のなさが見えてきました。スタッフ一人一人の能力によって、無事全道をやり遂げられたと思えます。最後に、自分で考え、自分で動き出し、全道を企画運営して行って、誰かがやるのを待っていたり、教えてもらうのを待っていた自分を卒業し、自分から考え、自分から行動するようにしていきたいと思えます。そして、多くの青年たちにもそんな事を考えていってほしいと思います。

二〇〇五年全道青年の集い IN札幌実行委員会 委員長 神力 陽

編集後記

各地区で合同堅信式が行われました。かつて使徒たちはキリストの意向に従って、霊のたまものを、洗礼の恵みを完成するものとして、按手をもって新信者に与えました。ヘブライ人への手紙に記されているように、洗礼と按手の教理は、最初のキリスト教教程の要素の一つに数えられるようになりました。この按手はカトリック伝承によって、ペンテコステの恵みを、ある意味で教会の中に永続させるものであるところの堅信の秘跡の起源とみなされています。堅信という呼称は、この秘跡が洗礼をより強固なものとすると同時に、その恵みをさらに強化するということを表しています。

堅信を受けた信者の人々が、聖霊によってこれからの教会をより強固なものとしていってくださることを確信してやみません。

教区風の風への寄稿ありがとうございます。皆様の寄稿をお待ちします。(一千字程度)